

善 悪 を 超 え る 神

——マタイ福音書5章45節からの考察——

橋 本 滋 男

1. 問題の所在とその手がかり

「父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる」(マタイ5.45b)というイエスの言葉は、現在のマタイ福音書の文脈では、その直前に示された「しかし、わたしは言っておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈れ」(5.44)という徹底的な愛の勧めの根拠として述べられている。後者(44節)は、我々の通常の考え方や行動基準を覆す言葉であり、我々にとって到底実行不可能な教えに聞こえるが、それにまして、前者(45節b)は驚きと同時に大きな疑問を我々に投げかける。神が善人に対しても悪人に対しても同じ報いを与えるのであれば、神はその本来果たすべき重要な役割を放棄していることにならないのか。旧約聖書の時代以来、神は一面において絶対的な裁き主であり、そうであればこそ、人間の犯す罪については神に対して何らかの償いが必要とされるのであり、この理解に基づいて、神に対する贖罪の決定的な出来事としてイエスの十字架死が受け入れられているのではないか。45b節の言葉では、そのようなキリスト教信仰の基本的な考えが全く無視ないし否定されているように思われる。一体、45節bのイエスの教えはどう理解すべきだろうか。この言葉が明白に述べているように、もし神が無条件に正しくない者をも正しい者と同じに見なすのであれば、贖罪は不必要となってしまうのである。

ここで述べられている「善・悪」とは、社会一般に容認されている基準にしたがって人間が下すその都度の「善・悪」であって、相対的で誤りを含む判断であるから、神はそれに左右されることなく、人間の決める善惡を超越

している方である、と理解し、こうしてこの言葉のもつ思想的問題を回避する方法が考えられるかも知れない。しかし45節 b では、人間の下す倫理的判断の妥当性が問題となっているのではない。イエスの言葉では端的に、神は善人・悪人の行為を不問に付すと言われているのであって、この言葉の内包する問題は意外な深さをもっていることが認識されねばならない。神が善人・悪人のそれぞれに対してふさわしい報いを与える、両者を同等に扱うと主張することは、神はどの人間に対しても結局のところ不公平であるということに他ならず、その考えは神に対する人間の信頼を著しく損なうおそれがある。さらに神は善・悪への正しい処置を施さないのなら、これを突き詰めるト、神はいわば単なる無為の存在となろう。イエスはなぜこのような危険な発言をしたのか。イエスにおいて神の前における人間はどのように理解されているのだろうか。人が自らの行為の結果として当然に引き受けねばならない「報い」(賞罰)を、イエスはどう理解したのか。マタイ 5.45 b の提起する思想的問題はこのようにきわめて大きいものであり、これについて別の角度から論じたこともあるが¹⁾、本小論ではさらに問題の整理と理解のための手がかりを探ることに努めてみたい。

ここでまず上掲のマタイ 5.45節 b の真正性を短く考察しておく必要がある。福音書に記載されている数多くの「イエス」の言葉が必ずしもイエス自身の発言に由来するのではなく、むしろその多くは、初期キリスト教の宣教活動の中から、彼らによるイエス解釈の表現として編み出されたものである。この認識は、今日の福音書研究において様式史方法や編集史方法が学界において一般に妥当なものとして承認されるようになって以来、いわば常識化している。それに伴い、記載されたイエスの言葉の真正性を確認するための方法がいくつも提案され、さらにそれらに対する批判的検討が積み重ねられて、今日も最終的な合意を得るには至っていない。しかしそうした学的検討の経緯の中から最も厳しく、それゆえに最も確実性の高い方法として大方の支持を得ているのは、当該の言葉がイエス時代のユダヤ教とも初期キリスト教とも思想的特質において合致していく、したがってそれらから由来する可能性が乏しく、イエスに帰し得るもの(「非類似の原則」principle of

dissimilarity)²⁾ という判断である。この方法に照らして考えるとき、45節 b の言葉は、ユダヤ教の教えにもキリスト教の思想にも合致し得ないどころか、むしろそれら両者にとってその教えを根底から覆しかねない深刻な躓きあるいは挑戦ともなり得る、きわめてユニークな言葉であり、したがって我々は積極的にこれをイエスに由来する言葉であると判断せねばならない。つまり45節 b を非真正であると見なすことによってこの躓きに満ちた発言をイエスの思想から排除するという道は、閉ざされているのである。

さて我々は45節 b の提起する問題について理解を深めるため、この言葉をその文脈との関連で、続いて文中の 1 語に注目して、考察してみたい。すなわち、

1. 45節 b は父なる神の人間に対するあり方を示しているが、この文は人間の人間に対するあり方を語る44節（敵を愛し、迫害する者のために祈れ）の根拠として提示されている。44節はルカ 6. 27 (35) に並行文があるので、マタイはこれを Q から入手したと考え得る。他方、45節 b はルカに記載されていないので、マタイがこれをどこから得たか不明であるが、しかし上述のように、理由を示す文頭の オテ³⁾ を含めて45節 b がイエスの真正の発言であると判断するなら、オテ⁴⁾ のかかる文が必要であり、このラディカルな言葉を理由として求める文として、同様にラディカルな愛敵の教え（44節）にこれがかかるのが論理的に自然な接続であろう。ルカにおける愛敵の教えの神学的理由付けが 6. 35 で後から補われていることは、我々の推定を間接的に指示するものである。ルカの理由付けが一般的抽象的であるのに対し、マタイ 5. 45 b はきわめて具象的である。こうした理由により、以下において我々は、45節 b を44節との関連で考えていきたい。但し、この二つの文に挟まれた45節 a 「あなたがたの天の父の子となるため」は、愛敵の教えを実行することによって得られる報賞を述べ、これによって不可能と思われる愛の行為が促されるよう動機付けをしており、本来の文意の流れに支障を持ち込んでいる。それは45節 b と矛盾する考え方であり、マタイによる付加と見なされる。⁴⁾

2. 45節の「善人にも悪人にも太陽を昇らせ……雨を降らせる」という述

部を導く主語は、原文では単数3人称の動詞「昇らせ」「降らせ」に含まれており、独立した単語で示されているのではない。しかしこれらの動詞の主体として、神が意味されていることは明らかである。この文中の「太陽」にかかる所有代名詞属格に、我々はイエスの神理解についての一つのヒントを見ることがきよう。

2. イエスにおける人間関係と神・人関係

問題となっているマタイ5.44—45は、「山上の説教」の中のいわゆる反対命題の一つで、その第6項に配置されている。5.21以下において、イエスは6回に亘って旧約聖書の基本的な戒律を挙げ⁵⁾、その一つひとつに対して「しかしわたしは言っておく」に導かれる反論の命題を掲げてこれを論破していく、という構成になっている。それは、イエスが旧約聖書に優る権威をもって旧い誠めを廃棄あるいは止揚し、それに替わる新しい教えを次々に提示するというもので、読者に強い印象を与えずにはおかしい。しかしこれをルカの並行箇所と比較してみると、ルカでは反対命題の構文になっていない。また6項目のうちルカに並行文があるのは、第3（離婚を禁じる）、第5（復讐を禁じる）、第6（敵を愛せよ）である。したがって山上の説教においてイエスの教えを反対命題の文形に整えたのはマタイであると推定し得る。

しかし「敵を愛せよ」というイエスの教えは、「敵を憎め」という旧い対立的で閉鎖的な教訓を否定するのみでなく、「隣人を愛せよ」という教えの限界を根本的に克服するものである。⁶⁾そこでは隣人と隣人でない者との区別そのものがすでに撤廃され、愛の対象は何によっても制限されないのである。そしてこの人間関係における区別の撤廃を告げる教えは、直ちに、⁷⁾神の側でも「善人・悪人」の区別を超え、両者を同等に扱うという45節の教えと対応し合う関係になるのである。注目すべきことは、ここで「敵を愛する」という対人関係のあり方を述べる44節が、神は人間をどのように見ているかという45節と結びついていることである。

イエスにおいて人間関係（人の人に対する振舞い）と神・人の関係（人に

対する神の配慮と神に対する人間の信頼) が不可分であることは、彼の他の多くの発言からも知ることができる。たとえばマルコ12. 28以下の、ある律法学者がすべての掟のうちで第一位の重要性をもつ掟は何かと尋ねたとき、イエスは「心を尽くして……神を愛すること」(申命記 6. 5) を教える。この論争物語で重要なことは、イエスは第一の掟(単数)を求められたにもかかわらず、この返答に続いて直ちに、尋ねられていない第二の掟「隣人を自分のように愛せよ」(レビ19. 18) を告げていることである。すなわち、イエスにおいて「神を愛すること」は「人を愛すること」と切り離して提示されてはならないのである。さらにマルコ10. 17以下の、永遠の命(神との正しい関係のあり方)を得る道を尋ねる男に対し、イエスはモーセの十戒の後半のみ(正しい人間関係のあり方)を教える。

人間関係と神・人関係のどちらがどちらの根柢でありあるいはその表現であるかは、この問題について触れている伝承の類型によって異なっている。たとえばマタイ 5. 23以下の、祭壇に神への供え物を献げることと兄弟との和解の優先問題では、後者が第一だと位置づけられる。しかし前者が放棄されるわけではなく、兄弟との和解によって神への行為が代用されるのでもない。いずれにせよ、この二つの関係は不可分であり、どちらの一方も他方を欠いては成り立たない、⁸⁾ というのである。

さてイエスにおいて人間関係と神・人関係が上述のように理解されているのであれば、人が敵を愛することと神が悪人にも善人にも同様に太陽を昇らせることとの間には、並行の関係が見いだされる。神の人間に対するこのようなあり方に基づいて人が敵を愛するとき、人は自分に逆らう者に対して無抵抗となり左右の頬を向けることも当然の勧めとなる(マタイ 5. 39)。それは相手の行為に基づいて下されるべき賞罰を超える振舞いであり、打算を超える行為となる。それはイエスの別の言葉では、返礼をすることのできない客をこそ招待すべきだという教え(ルカ14. 12)に通じる精神である。このような客こそが主人の好意を心からの喜びをもって受け入れるであろう。イエスによれば、人間は神の前で返礼の出来ない存在なのである。あるいは招待に対して返礼できない者の例として、子供を考えることもできよう。イ

エスが神の国を受け入れる者として子供を取り上げ、子供がイエスに近づくのを妨げてはならないと教えるとき（マルコ9.36-37、10.14-15）、その根底に同じ思想を読み取ることができる。

3. 神の無差別

旧約聖書においても、神はすべての者に対して寛大であり恵み深いことが讃えられているが（詩編145.9）、イエスは神についてのこの理解を徹底化し、⁹⁾それによってユダヤ教の神観を超える。そしてそればかりではない。神が悪人にも善人にも同じく太陽を昇らせるという場合、それは一面で神の無条件で無差別の愛として受け取られるが、しかし同時に現実的には神の無為とならざるを得ない。無価値に等しいような雀1羽でさえ、その生死は神の掌中にあると言われる一方で（Q、マタイ10.29、ルカ12.6）、それよりも「はるかにまさっている」はずの人間が現実に経験せねばならない運命は、当人の善・悪（信仰、罪）とは無関係であるという、一見きわめて冷酷な事態を我々は冷静に受け取る以外にない。ルカ13.2以下において、イエスは二つの、おそらくは当時実際に起こった事件を引き合いに出して、人の受ける運命について論じている。それはエルサレムにおいてピラトがガリラヤからの巡礼を弾圧した事件（13.2）と、それに前後してエルサレムを取り囲む城塔の一つが倒壊したために18人が圧死した事件である（13.4）。このペリコーベにおいて2回繰り返されている警告の言葉「言っておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる」（3節b、5節b）は、その文体と用語から見て、後の付加部分と考えられる。これらの結びの文を除いて、事件について述べるイエスの言葉（2、4節）を読むと、このような災難に遭った人は他の人より罪深かったわけではない、というイエスの主張が浮かび上がる。すなわち現実において人が受ける不幸・不運は、罪の有無やその程度の差とは関係がないのであり、幸・不幸は神が人間一人ひとりに適切に与える賞罰ではないという考え方である。逆に言えば、災難を免れ得た人は、その理由として自らの信仰を誇ることはできないということである。マタイ

5.45で「太陽」を比喩的に用いて語るイエスの神・人関係の思想は、ルカ13.2、4において、人にふりかかった災難の実例に即して述べると、不幸は善人（信仰ある人）にも悪人（罪ある人）にも等しく襲う、ということになる。あるいは、敵への愛が全く通用せず、逆にそれが利用され、悪人を悔い改めさせることができない地点にも、太陽は昇るのである。

なおマタイ5.45での「太陽」について、我々は暖かく育ててくれるものというイメージをもつであろうが、照りつけるパレスチナの砂漠を背景にして考えると、焼き枯らし苦しめるイメージも持ち得ることを指摘しておきたい（マルコ4.6参照）。

4. 創造神信仰の徹底

神が善悪を超えてすべての人に等しく太陽を昇らせ雨を降らせるということは、人の側から言えば、神の与える太陽の光、雨の潤いをありのままに受け取るということである。そこでは人間の計画や努力はもとより、神に対する積極的な働きかけによって自分に都合のよい事態を生み出そうとする計算が全く放棄される。そして神の意志への徹底的な服従によって現実を受け入れるのである。しかもそれは現実への諦めではなく、神が確実にこの世界を支配しているという信頼に立つ姿勢である。イエスは神をこのような神として紹介する。彼のこうした神理解の根底に、我々は彼の創造神信仰を見いだすことができる。マタイ5.45bの「太陽」には、属格「彼の」*αὐτοῦ*が付せられているが、この代名詞が神を指すことは明かである。すなわち、「太陽」は自然物の一つでありながら自立して存在し運行するのではなく、神によって存在し天空に昇り人に光を投げかけるのである。人間もまた同様に神の支配の中で存在し、神の意志に服しながらその生を営む。ここでは神への徹底的な信頼は求められるが、すでに善悪は超えられているので、それに対する賞罰も問題にならないので、救済論も終末論も存立し得ない。それはイエス個人においてのみ例外的にそうであるというだけでなく、イエスによればすべての人間においてそうなのである。¹²⁾

ここに成り立つ人間観は、イエスのたとえ話に登場する人物類型で言えば、主人の言葉に忠実な僕であろう。ルカ17.7以下の、主人の命じるとおりに日暮れまで農作業で働いた僕は、その後の食卓に給仕として仕える。彼は主人の言いつけを行なっても報酬を要求することはできない。これと対比的なタイプは、報酬を得るために契約に基づいて雇われる労働者である。たとえばマタイ20.1以下のたとえ話に登場する労働者は、報酬が不公平であれば主人に正当な抗議を言う権利をもち、あるいは主人の意志を理解し得ぬまま、不平のうちに報酬を受けて解雇される。このたとえにおける農園の主人は、労働者の作業時間に応じたふさわしい支払いをせず、すべての労働者を同じように（労働者からみれば不公平に）扱うという点で、5.45bに共通する。

5. ま と め

マタイ5.45bから出発した以上の簡単な考察をまとめてみると、

1. イエスにおいてあるべき人間関係は神・人関係と相即している。この二つを切り離して、普遍的な人間愛を主張したりするのではなく、また隣人を後回しにした信仰の勧めでもない。
2. イエスによれば、神は人間を無条件に受け入れるのであって、この神理解によって功績や賞罰の思想は克服される。そしてその限りで、救済論は不需要である。
3. こうした神理解を支えるのは創造神信仰である。創造神信仰はもちろんユダヤ教にもあったが、イエスはそれを受け入れ、純化、徹底化させた。
4. 神の前ににおける人間はいわば忠実な僕になぞらえられる。彼は神を信頼し、一切を（不幸をも）神に委ねる。¹³⁾

注

1)拙論、「イエスの復活理解」『基督教研究』、第54巻第1号（1992）、19頁。

2) Polkow, D., "Method and Criteria for Historical Jesus Research," Society of Biblical Literature 1987 Seminar Paper, pp.336ff., は、これまでに提唱された方法を25

挙げ、それらに批判を加えている。このうち、「非類似の方法」については、トマス福音書に収録されているイエスの言葉は、ユダヤ教にも初期キリスト教にも類例がなく、しかもイエスに遡る可能性が少ないことを指摘して、この方法に対する批判としている。しかし彼は「初期キリスト教」をいわゆる正統的教会に限定し、トマス福音書に代表されるグノーシス的な流れを排除しているところが問題である。この他、Stein, R.H., "The 'Criteria' for Authenticity," *Gospel Perspectives*, 1980, pp.225ff.; 小河 陽「イエスの言葉——その真憑性の基準について」『イエスの言葉』、1978. 5—40頁。

- 3) ルカは愛敵の教えを2回繰り返して記している(6.27, 35)。彼はこの教えを中心テーマにして6章におけるイエスの説教を構成しており、所与のQを忠実に採録しているわけではない。したがって、逆に言えば、マタイ5.45bがもとはQにあって、ルカが利用しなかった可能性も全く否定され得ない。
- 4) 45節aに含まれる語のうち、「子ら」(父の子ら、*vἱοὶ τοῦ πατρός*)は、先行の9節の至福の教えの句「神の子らと呼ばれる」(*vἱοὶ θεοῦ κληθησόνται*)を受けており、「あなたがたの天の父」(*πατρὸς ὑμῶν τοῦ εὐορπανοῖς*)は、16節の同じ句を受けている。
- 5) 反対命題の第1項(殺すな)、第2項(姦淫するな)、第4項(偽りの誓いを立てるな)は、明らかに旧約律法の根本であるモーセの十戒に関わる。第6項の後半「敵を憎め」(43節)のみが旧約聖書に見いだされない。
- 6) 「隣人を愛せよ」という教えは、レビ19.18からの引用であろう。ここでの「隣人」とはイスラエルに属する者のことであって、神への信仰を共有していない非イスラエル人は「隣人」には含まれない。イエスはこうした愛の教えの限界を問題にする。それは隣人愛を説くイエスのたとえ話にサマリヤ人を登場させることに通じる考え方である(ルカ10.30以下)。
- 7) 上述のように45節aはマタイによる付加であるので、これを省くと、44節の後に45節bが続く。
- 8) ルカ11.4ab(=マタイ6.12、「主の祈り」の中の赦しの条項)でも同様である。
- 9) たとえば、知恵15.1、など。
- 10) これらの事件は、ヨセフ等の歴史資料には記載されていない。一つは宗教上の問題に対する抗議を政治的騒乱として鎮圧した事件、他は偶然の事故による災難であろう。これらは当時の人々に神義論的な問題を提起する事件として語り継がれ、イエスの発言を誘ったものと思われる。
- 11) 3節bと5節bがほぼ同じ文体で文脈上同じ機能をもっていることは、これらが伝承の過程で記憶の滑らかさを得るために付加されたことを示唆する。またこれらの文で強調されている「悔い改め」はルカの好む語であるので、ここに編集者ルカの手を推定することも十分可能である。
- 12) したがってイエスから見れば、彼の十字架死は救済的意義をもち得る出来事ではないし、そう解釈される必要性もない。伝統的なキリスト論では、イエスの十字架に

よって全人的救済がもたらされたというとき、イエス自身の救いについては彼の無原罪や神性を根拠にして、そもそも救済の必要がなかったとするが、史的にみれば、イエスの創造神信仰において罪、悪は止揚されている。

- 13) イエスの思想において、神の前における人間のあり方の一つとして、「僕」の他に「子」がある。これはイエスが神を「父」と呼んだことと関連して、イエスの神理解、人間理解を考察する手がかりとなる。ここではこれについて論じることはできないが、イエスが神を父と呼ぶ場合、弟子たちにも神に対してそう呼びかけることを教えていている（ルカ11. 2）、自分だけが特別な立場で排他的に「子」であったのではないことに注意しておきたい。たしかにイエスの発言中には、イエスが自分と弟子たちを含めて「わたしたちの父」という用例は皆無であるので、イエスの意識においてイエスにとっての神との「父・子」関係と弟子たちの信仰における「父・子」関係は区別されていた、という議論もあり得るが、しかし福音書伝承全体を通して、イエスが1人称複数（わたしたち）で語ることがほとんどないという事情を無視することはできない。

（1994年12月30日、擷筆）